

18世紀後半の東蝦夷地での「ノシヤップ」

はじめに

前回は、松前藩自体の財政状況について見てきました。今回は東蝦夷地（太平洋側のアイヌ地）の情勢について見て行きます。寛文9年（1669）の「シヤクシャインの戦い」以降、蝦夷地（アイヌ地）に対する交易船の渡航については制限されていましたが、18世紀になり場所請負制が一般化すると、商場の経営が請負商人の手に委ねられ、蝦夷地に交易船が入りする

東蝦夷地の奥地の「剛強」

蝦夷地には各地域を押し込んでいるアイヌの首長がおり、その首長たちの上に立つのは松前藩主であると幕府に報告していましたが、この東蝦夷地の奥地では、アイヌの自立的な勢力が強かったとされ、松前藩の支配に必ずしも従っているとは限らない事件が続いていました。

ようになりました。また、藩の財政が窮乏し、借財返済と藩運営のため、藩主直領の商場までも手放す事態となりました。安永3年（1775）には、東蝦夷地にある藩主直領のエトモ、アツケシ、キイタツプ、クナシリの4場所や、西蝦夷地（日本海側のアイヌ地）のソウヤ場所などが飛騨屋の請負となり、蝦夷地全域の場所経営が商人の手に帰りました。

キイタツプ事件

元文4年（1739）に記された『北海随筆』によれば、「惣て東蝦夷剛強にして、やもすれば松前の命をなやがしろにせり。キイタツプ、アツケシ、クスリのあたりは、別て取扱六ヶ敷也。去々年もキイタツプに事ありて、去年は商船行事やめられたり」とあり、キイタツプで騒動があつたの

で、藩主の交易船を送れないという事態が起きました。

ノシヤップ事件

宝暦8年（1758）7月には、東蝦夷地ノシヤップの首長シフクが、アイヌ二、三千人を率いて、西蝦夷地ソウヤのアイヌを襲撃し、60人余りを殺害し、200人余りを傷つけたという大事件がありました。その原因は、シフクの部下をソウヤに遣わせ、ソウヤのアイヌに頼んで一泊しましたが、そのうちの一人が突然死亡したというものでした。松前藩は、翌年アイヌの紛争の鎮撫と産物収集のため、藩士をアツケシに遣わしたところ、シフクは部下370人を率いてアツケシに来て、今回の騒動の罪を陳謝したので固く訓告し、償いとして太刀や宝物を出させてこれをゆるしました。

ラッコ島襲撃事件

安永元年（1772）には、キイタツプから帰帆した卒（下級兵）から、前年にラッコ島（ウルップ島）に来た蠻（異国）人によって我地

方のアイヌが殺されたので、その地のアイヌが蠻人に不意打ちをして、蠻人を20人殺害すると、残り70人余りは海を越え退散したと報告がありました。

クナシリ首長ツキノエ

クナシリの首長ツキノエは身長が6尺（約1.8m）を超える大男で、剛勇でしかも狡猾（ずるがしこい）とされ、近隣のアイヌが彼に従っていました。

安永3年（1774）飛騨屋久兵衛は、クナシリ場所を請け負うことになり、同年松前藩の役人を乗せた交易船を、クナシリ場所に遣わしました。翌4年、交易船を又同地に遣わすと、ツキノエは何に不満があつたのか、蝦夷介抱（土産）品はもとより、その他請負人の荷物を押領し、これに換えるべき産物を渡しません

でした。松前藩の役人は通詞（通訳）を通して、このことをツキノエに諭しましたが、聞かないばかりか益々暴行するため、飛騨屋は安永5年（1776）以降、

交易船の派遣を中止することにしました。

ツキノエは、安永7年（1778）と翌8年にロシア商人を案内して、ノツカマツプ及びアツケシに来ました。二度目となる安永8年、松前藩の役人はロシアの商人に対し、異国交易の場所は長崎港のみと幕府が定めているので、以後決して渡来せぬようにと伝えました。また、ツキノエには、異国人を連れてきたことに対し厳しく叱りました。結局ロシア商人は日本との交易について、何も成果が無く帰りました。

ツキノエは、飛騨屋との交易を謝絶され、さらにロシア商人との関係も不調となったので、ついに罪を謝して交易の復興を願ったので、天明2年（1782）から再び交易船を遣わすことになりました。また、飛騨屋にとっても、運上金を前納したにもかかわらず、8年間もクナシリ場所の収益が無かったことは、大きな痛手となりました。